

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.70 人生を総括 する時間

古川の妻、優子から古川の死を告げる連絡が入った。数日前に見舞いに行き、古川の血色の良い顔を見て安堵していた姫の中を衝撃が走り、なす術もなく茫然としている。

「なんで、なんで古川さんなの！そりゃ、タバコを随分吸って肺癌になったかもしれないけど、なんで古川さんの番なの。古川さんはあんなに皆の面倒も見てたし、人助けもいっぱいしたし、皆から好かれていたのに。世の中にはもっと悪い人がいっぱいいるでしょ。さっさと姿を消してほしい人がいっぱいいるじゃない。なんで、古川さんが死ななきゃいけないのよ。神も仏もあつたもんじゃない。」

突然の訃報に泣き崩れる姫をなすすべもなく御手洗と山部が立ち尽くして試している。

「生きとし生けるもの、いつかはこの世を去らなければいけない。10

ヵ月の乳児の事もあれば、生誕100年の老人の事もある。それは人それぞれ持って生まれた定めや。確かに古川はんはタバコを一生吸わなければ肺癌にならなかったかもしれへん。でもそれはタラレバの話や。時間の逆戻しは出来ひん。でけへんのやったら思考を変えようや。」

御手洗透が姫の肩に手を添えた。

「……………」

御手洗の言葉を理解できないまま御手洗の目を見つめる姫。

「ええか？ 物は考えようや。確かに古川はんは四十七歳でこの世を去った。この事実は受け止めがたいほど辛い事や。でも、よ～考えてみー。古川はんは癌と分かってこの健康道場にも通う事が出来たし、和尚と心を交えることもできた。恐らく、最後の時間は家族とも一緒に使う事が出来たやろ。ある意味これは幸せな事なんやで。世の中にはある日突然心臓が止まったり、事故にあったりして否応なく家族と引き裂かれる人もおる。人生の総括をする時間を与えられなかった人の事を考えたら、古川はんは幸せなんとちゃうん。」

御手洗透の傍には和尚が穏やかな表情で座していた。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一